

前稿で「旅は日常生活の中の一つの虚構だとすれば……」と書いた。そしたら二、三の読者から疑義と質問があった。「虚構」が判らない、というのである。

これは、私の創った言葉ではない。正確にいえば、二十二年前、安岡章太郎さんの言った言葉である。日本航空の機内誌に確か「旅行記」という題の懸賞小説の選評が載っていた。この中の言葉である。——「旅というのは、日常生活の中のひとつの虚構であって、旅行記はその虚構性を事実に基づいて巧みに再編成してゆくだけの努力が必要である。…」——これだけが、メモに残っていて後はない。しかし、この一節ほど旅の本質を明快に言い切った人はいないのではないのか。たいていの旅行記がつまらないのは、ただ事実をそのままに書連ねているだけだからだ。何の工夫もしていないからである。

この意味で前稿も旅行記の一つだとすれば、読む側にとっては、すこぶる退屈な駄文であつたに違いない。

旅は日常生活の延長ではない。旅に出るや否や、われわれは日常生活から離れる。遠くなればなるほど離れてゆく。夏目漱石が松山赴任という旅に出なかったら『坊ちゃん』は生れなかったたろうし、熊本に赴任しなかったら『三四郎』は残らなかっただろう。

松山の下宿生活をそのまま綴っただけでは、ああそうだったのか、に終わったに違いない。『坊ちゃん』が生れたからこそ、漱石の松山時代が根掘り葉掘りされるのである。『三四郎』以来、どれほど数多の青年たちが旅における「虚構」を夢見たことか。

『三四郎』読みたるころぞ三等車向ひの席にをみな夢見き

風景にせよ静物にせよ人物にせよ、これをそのまま描いたのでは「日常生活」の記述とおなじで、少しも面白くない。特に写真を媒介にした念入りの作品にはうんざりする。最大の理由は、対象に対する尊敬とか敬虔とか、不思議さの念とか、そういうものに欠けているからである。在るのは、対象の表面のみをなぞった自己満足だけだからだ。

さればと言って、現今はやりの抽象や前衛の作品に組するものではない。そこには虚構性が皆無だからである。観ていて直ぐ飽きる。なかには反吐を催すものがある。招待券を送って来る友人が何人もいるので、たまに上野へ出かけるのだが、その都度後悔する。そろそろ、義理の付き合いはやめようと思っている。

岡本太郎の作品を組上にのせてみる。フィギュア・スケATINGに例えれば、彼の作品は、氷上を舞う少女に初めから衣を着せていない。だから、一瞬驚くし目を見張るが、

美しさもないし深さもない。直ぐに飽きてしまう。ある時は静かに、ある時はスピードを上げて氷上を滑っていた少女が、一瞬棒立ちになって急速回転する。あたかも1本の錐のごとく、一体の裸身のごとくに変身する。これが、抽象というものである。絵画における虚構性とは正にこのことではあるまいか。油彩における虚構性を満足しているのが『放牧二馬』である。

これに、匹敵する淡彩作品は在るのか。小川芋銭の『牛久沼風景』がそうであろうか。また、初期の網干作品にその閃きを観ることができないだろうか。

「省略し、白を画面に残し、絵具の透明度を生かす」(大畑哲郎)という淡彩画の省略には、描かざる対象への想念、祈念がこめられていなければなるまい。

前稿を一片の旅行記に終らせたくはない。この時の一週間には、人物・静物・風景において日常生活には得られぬ諸々の出会があった。虚構性があった。これらを再編成して一読に耐え得る紀行文を書いてみたい。何年かかるか解からないが。 (2004・2・10)